書　評

細川英雄・太田裕子編著

キャリアデザインのための自己実現
過去・現在・未来を結ぶバイオグラフィ

東京図書、2017 年発行、222p.
ISBN：978-4-489-02273-9

牛窪　隆太

1.「キャリア」デザインと「ライフ」デザイン

2020 年に達成目標年度を控えた「留学生 30 万人計画」では、留学生の受け入れの拡大だけではなく、就職と日本社会での定住という目標が掲げられている。一方で、日本国内で就職を決める留学生の割合は、全体のうち 3 割程度にとどまっているのが現状であり、留学生の大学での学びをどのように就職に結びつけていくのかという課題は、今後、大学・企業・政府関係省庁が連携し、取り組むべきものとされている（文部科学省、2017）。その流れの中、各大学には「ビジネス日本語」関連科目や「就職支援プログラム」が設置されるようになり、日本の企業文化や就職活動の手順について留学生を支援する体制が整い始めている。この文脈でいうキャリアとは、まさしく職業選択のことであり、キャリアのための日本語教育とは「就職のための日本語教育」を指すものになる。

これに対し本書は、キャリアデザインとは、ライフデザインのことであるとする。自身が人生において何を成し得たいのかを知るためには、自身の過去・現在・未来を自己表現によって結んでいくことが必要であるとし、キャリアデザインにおける「ことばの教育」の意味をライフデザインにおけるバイオグラフィやライフストーリーの観点から提起している。キャリアを目先の就職や進学ではなく、ライフ（＝人生）のデザインそのものに重ねている点で、本書が提起している議論は革新的である。しかし率直に言って読後、雲をつかむような取り留めのなさをも感じた。そこで、本書評では、この取り留めのなさを手掛かりに、本書が提示したものの意味について考えてみたい。

2.「ライフ」が提起するもの

取り留めのなさの背景にあるものとして、一つに本書における「対象」が多岐に渡っていることが挙げられる。本書で提示される「教育実践の対象者」は、外国人留学生だけではない。それは、ライフストーリーに興味をもつ日本人大学生や地域のコミュニティセンターに集まる子ども、発達障害を抱える中学生やフランス語学習者でもある。したがって、

いわゆる教育実践の事例集として読み始めると、次第に議論の行く末がわからなくなる。

また、本書の「対象者として想定されている読者」も一様ではない。教育実践を担当する教師であったり、はたまた教育実践の参加者である学生に向けて書かれていたり、よりアカデミックな議論がなされていたりする。全体を通して読者に語りかけるような平易な文体が用いられているものの、読者である私は、どこに軸足を置いて読み進めればいいのかわからなくなってくる。この点に関連して、編著者の一人である細川は、本書の冒頭で以下のように述べている。やや長くなるが引用する。

> この本は、一種のテキストですが、テキストといっても、順番に覚えたり記憶したりするものではありません。小説を読むように、ぼんやりと読み流してみるのもいいし、伴走の人とゆっくり熟読するのも悪くありません。あるいは、数人でワイワイ言いながら読みあうのも一つの方法です（p. iv）。

本書の途中で迷子になってこの記述に戻ったとき、自分が大きな読み間違えをしていたのではないかということに気がついた。キャリアデザインという用語に引きずられるように、キャリア教育を考える際に実用的な部分や教育実践の方法論を探そうとしていたのではないか。本書は、おそらくはそのように読まれるべきものではない。それぞれの著者が誰のキャリアをどのような角度から考えようとしているのかに注目しなければ、この本の真意は理解できないだろう。そこで以下では、本書の構成を追いながら、どのような対象者のキャリアをどのような角度から考えようとしているのかについて概観していきたい。

3. 本書の構成と議論の射程

本書は大きく、2 部構成からなる。第 I 部では、自身の経験を記述することの意味をめぐって、それぞれの著者が実施している教育実践の記録が示される。

1 章の古賀論文では、初級終了段階の日本語学習者を対象とした教育実践において「これまで」から「いま」をすくいとり、「日本での出会いと私」というテーマで作品を完成させる実践を紹介している。古賀の実践で興味深いのは、初級終了程度の日本語学習者であっても、日本での出会いという具体的なテーマを設定することで日本語を使って「これまで」と「いま」をつなげる実践が可能であることを示している点にある。これに対し、2 章の遠藤・長嶺・森元論文では、中上級段階にある日本語学習者を対象に 10 年以上実施しているという「自分史を書く」教育実践が報告されている。事例では、将来が見えないと書いていた学生が、活動の中で、「弱い人を守る」というテーマを見つけ、その延長線上に、将来の仕事や家庭を位置づけるようになった過程が示されている。

留学が人生において一つの転機となるものであることを考えれば、1 章、2 章で報告されているように、自身の過去から現在に意味づけを行い、人生のテーマを探すことには、帰国後に自分のキャリアを考える留学生にとっても、大きな意味をもつものだろう。

3 章の高橋論文では、人生のテーマを考えることが、より前面に押し出されている。対象者は、進学を目的として準備教育が行われている日本語学校の学生たちである。高橋は、

教育実践の目標について、他者と了解し合うことで、辞書的な意味を関係性的意味へとつなげていくこと（p. 48）であると説明する。学生たちは、人生のテーマや対話の意味について学んだ後、高齢者施設を訪れ、「対話の背骨」に注意しながら対話を行う。自身の人生のテーマを考えるにあたって、その社会に暮らす先輩に話を聴き、その人生のテーマを考えるという設計は大変興味深い。日本語学校の学生たちにとっては、日本社会で暮らす人を深く知ることと、日本社会での自分の今後の人生を考えることが、自然と重なり合うものになるはずだからだ。高橋の議論は「市民社会性」へと結ばれていくが、この点についてより深い議論を読みたいと感じた。一方、4 章の山本論文で対象となるのは、地方の小規模大学の留学生である。山本論文において目を引くのは、留学生教育を行う自身の教師としてのキャリア形成が記述されている点だ。ぼんやりとした動機から日本語教師になった自身を振り返りながら、「崩壊状態のクラス」（p. 73）で学生たちの空虚な日本語に向き合った経験を経て、自己理解の促進と表現に立脚した日本語教育へと展開するようになった経緯が丁寧に説明されている。

5 章の太田論文では、ライフストーリーの記述を通じて「ライフに指針を見出す」ことを目指した実践が取り上げられている。対象は学部の日本人学生である。太田の実践で特徴的なのは、人生を理解し指針を見出す方法に、質的研究法であるライフストーリー法を援用している点だ。学生たちは、公刊されているライフストーリーを読み、ゲストスピーカーの話を聴き、自分の経験を語りながら、自身のライフストーリーを記述していく。その過程において、学生たちはライフを貫く「指針」を見出していく。質的研究法の議論においては、ライフストーリーを記述する際、研究者は自身の「構え」に自覚的である必要があるとされる（桜井、2002）。実践に参加した学生の感想として紹介されている、人生は一つの道だけではないという気づきや、人生を解釈するうえでの多面性についての意見は、今後、自身のキャリアを考えるうえでの「構え」が、学生たちにできたことを示していると考えられるものであり、特に印象に残った。

続く、第Ⅱ部は、「自分をつくる居場所とアイデンティティ形成」について、実践例をもとに対象者への向き合い方が示される。第Ⅱ部で特に注目したいのは、キャリアをライフデザインの観点から考えることで広がる対象者の多様性であり、対象者に寄り添ってキャリアを考えようとする各執筆者の姿である。キャリアを職業選択という意味で考えるのであれば、対象者は必然的に狭まってくる。しかし、キャリアをライフデザインとして考えれば、対象者は限定性を持たない。地域社会や新しいコミュニティの中でどのように生きていくのかは、すべてライフデザインの範疇となるからだ。論考においては、特に、それぞれのコミュニティにおいて対象者に向き合う実践者の真摯な姿勢が伝わってくる。

1 章の佐藤論文では、地域社会で佐藤が実践している「ことばの市民塾」が事例として、取り上げられている。佐藤の実践で目を引くのは、参加者に「境界」を設けないという方針であり、参加者が書きたいことを語り、自分のペースで書き進めるという実践方法である。実践にやってくるのは、地域に暮らす小学生や中学生である。彼らは文章がうまく書けるようになるために市民塾に来ているわけではない。紹介されている「でも来たいからくる。不思議」という中学生の実感は、「自由」という方針に裏打ちされるものであり、市民塾の場が子どもたちにとって一つの居場所となっていることを示唆している。

居場所という点で、卓越した感銘を与えるのが、2 章の坂口論文である。この論考では、中学校の国語教育において、発達に問題を抱える学生に対する教師の向き合い方が報告されている。教職 30 年を越すという下田教諭は、個人の問題行動（授業中の読書）を中学校の教室コミュニティにおけるその学生の個性として周知させていくための読書指導を行う。授業中にパニックを起こすこともあったというその学生は、立体図形の本に出会うことから、模型を作品として教室に展示するようになる。逸脱行動から学生の特性に気づき、コミュニティにおける居場所の確保へとつなげる下田教諭の実践者としての判断は見事である。コミュニティにおいて受け入れられたという実感を持つことが、その後のキャリアへとつながるという点も、キャリア教育を考えるうえで大きな示唆を与える。対象者の今後に希望を感じることができる論考であった。

3 章の横田論文では、大学で教師になるために学んでいる学部一年生を対象にした「教師になるということ」を考える実践が示されている。学生たちの半数が、卒業時には一般企業に就職するという状況において、教師になるための勉強をする意義は何か。横田は、学生たちが「質問疲れ」を起こしている可能性を指摘する。「なぜ教師になりたいのか」と繰り返し問われる中で、最適解を選ぶ姿勢を身につけ、学生たちは、より深くは考えようとしなくなる。実践において、学生たちは「教師でなかったら」というオルタナティブ・ストーリーに気づくようになる。このことから、横田は答えではなく、ストーリーを語る場として、キャリアデザインを考える必要性を主張している。直接的には言及されてはいないが、おそらくこの実践では、教師志望者というコミュニティにおいて、自分の指針（テーマ）の異なる可能性に気づくことが大きな柱になっていると考えられる。

この点、4 章の今中論文では、コミュニティの生成が一つの柱となっている。大学のフランス語教育における二つの実践において、当事者意識をもつことと、コミュニティを生成することの意味が取り上げられる。フランス語授業の履修者に対する実践と、フランス語教員が主体となって実施している地域プロジェクトにおいて、参加者が当事者意識を持ち、コミュニティに関わることが、学生、教員双方のキャリアに影響を与えている。この実践におけるキャリア形成の対象者とは、フランス語を学ぶ学生であり、学生を支援する教員でもある。双方がどのようにかかわるのかについては、今後の研究の進展が待たれるが、キャリア形成を双方向から考える実践として大きな可能性があると感じた。

5 章の西村論文では、民間教育機関で留学生のキャリアカウンセリングを実施している立場から、より実際的な考察がなされている。キャリアデザインにおいて考えるべきは、外部環境でありその変化はコントロールできないものであるという。しかし、個人が自身の意思や行動をコントロールすることは可能であり、「なりたい自分」を描くことが、キャリアデザインにつながるとする。この主張は、ここまでの論考で主張されているキャリアデザインの要点をより実際的な観点から再提起するものである。紹介される企業の人事担当者の意見からは、企業のおける「多文化共生」への努力を垣間見ることができ、留学生の受け入れの背後に、教育機関と企業の担当者の連携と努力があることを再確認させてくれる。

最後章となる 6 章の山本論文の冒頭、著者は、滞在先であるオーストリアのグラーツにおける複言語環境の記述から議論を始めている。日常的に目にするという「異なる言語が

併存／共存する光景」（p. 199）から、複言語主義というキーワードが提示され、著者が関わった二つの実践が示される。特に、山本が大学で希望者を募り、実施したという留学生と日本人がともに「この海（日本海）」の名称を考えるという実践は、複言語主義において、言語だけではなく言語が示す価値について、他者との考え方に折り合いをつけることの重要性を教えてくれる。山本が描写するグラーツの複言語環境は、5 章で企業の人事担当者から語られる、異なる背景をもつ人材を会社に受け入れた先にある、社会の豊かさであるようにも読むことができる。エッセイ調で語られる山本自身の体験談からも、ことばの教育が担いうる役割には、暖かい希望があるのではないかと考えさせられた。

4. 読後に残される問い

本書を読み終えたとき読者に残されるのは、様々な現場で対象者のキャリアデザインに対峙する教育実践者たちの熱量と想いである。それとともに、キャリアデザインをライフデザインとして考えたときに生じる、豊かなライフとは何であるのかという新たな問いも読者には残される。よい就職先や進学先による豊かな人生という神話の崩壊を持ち出すまでもなく、キャリアのあり方は多様化している。誰もが認める正解としての人生ではなく自分自身の納得解としての人生をということも、誰しも一度は考えたことがあるだろう。

では、過去と現在からテーマを発見することで、未来にどのようなキャリアが描けるのか。この点について本書の議論からは、佐藤論文や坂口論文にその萌芽が感じられるものの、残念ながら、その行く先を読み取ることはできなかった。読者として多くを求めすぎている気もするが、今後、教育実践に参加した対象者たちのその後のキャリアについて調査を行うことで、ライフデザインとしてのそれぞれの実践の意義もより明確になるのではないかと思われる。

冒頭に挙げた留学生の就職率の問題は、関わるものが連携し、今後、取り組むべき課題である。しかしながら、現代の日本の若者の問題としても指摘されるように、離職と転職を繰り返す中で自分を見失うということの根本には、実用性や効率性に目を奪われ、つい画一的でわかりやすい教育や成果を志向してしまうという関係者の思考の問題もあるように思われる。その只中にあって、本書が問いかけているのは、自己表現によって自身の人生のテーマを探求するという、一見遠回りにも思える作業を通じて人生の根本に立ち返ることの意義であり、それに寄り添うことばの教育の可能性であると言えるだろう。

参考文献

桜井厚（2002）『インタビューの社会学　ライフストーリーの聞き方』せりか書房
文部科学省（2017）「外国人留学生の就職促進について」http://www.jasso.go.jp/gakusei/career/event/guidance/__icsFiles/afieldfile/2017/07/04/12_h29guidance_ryuugakusei-session_monkasyou.pdf より取得（取得日 2018 年 3 月 1 日）

（うしくぼ　りゅうた　関西学院大学日本語教育センター）